

4. マンモグラフィの比較読影

宮城 由美 三井記念病院乳腺センター

マンモグラフィ (MG) は、乳がん検診や精密検査、術後経過観察において重要な役割を果たす画像の一つである。MG読影の基本は、左右もしくは正常乳腺構造と比較し、異なる濃度や構造物がないかどうかを見極めることである。しかし、乳房の正常範囲の左右差や乳腺組織の重なりにより、その判断が困難な症例も少なくなく、結果として診断精度の低下を招く。

この課題を解決するための有効な手段が、現在のMG画像を過去のMG画像と比較する「比較読影」を行うことである。本稿では、MGの比較読影を行うことの重要性について述べたい。

比較読影で病変の存在診断、質的診断が容易となる所見

1. 局所的非対称性陰影 (FAD)・腫瘍

MGにおいて、乳腺組織は左右正対称とはならず、撮影時のポジショニングの

違いもあり、乳腺の重なりか病変かの区別が難しいことがある。また、正常な構造物なのか病変なのかの判断が難しい所見もあり、過去画像との比較によって濃度上昇の所見が顕在化、もしくは腫瘍が増大・辺縁所見の変化などを伴っていれば、病変としての指摘が容易となる。図1のように、今回のMGだけでFADの指摘が容易な症例の場合でも、過去画像があることで病変の確信度は高まる。図2は、1年前のMGで腋窩近くに境界明瞭腫瘍が新出した。2年前の画像でも別の場所に腋窩リンパ節が描出されていたことで、この腫瘍も2年前に撮像範囲外にあった腋窩リンパ節と判断されたが、今回は増大していたため、乳がんの診断がついた。

2. 石灰化

石灰化病変は、単年でも比較的指摘が容易である。しかし、淡く不明瞭な石灰化は、拡大を上げてよく観察しないと指摘が困難なこともあるため、少なくとも画面フィット (160%拡大) 以上で読

影する必要がある。石灰化を指摘できた場合は、過去画像と比較し、新規に出現した病変であれば精密検査もしくは短期間での経過観察が必要である。図3は、術後経過観察中に、対側に淡く不明瞭な集簇性石灰化が出現した症例である。この時点で超音波では病変を指摘できなかったため、半年後に経過観察としたところ、半年後には多形性石灰化となった。短期間の経過観察で診断がついたため、非浸潤性乳管癌 (DCIS) の段階で治療が可能であった。

3. 構築の乱れ (distortion)

distortionは、「正常の乳腺構造が歪んでいる」所見である。片側に見られることが多いが、両側の乳腺に硬化性変化があるため、左右同じようなdistortionを呈することもあり、左右の比較だけではなく、正常の乳腺構造との違いを指摘しなければならない。一度distortionを指摘され、針生検で硬化性病変と診断された後の経過観察では、比較

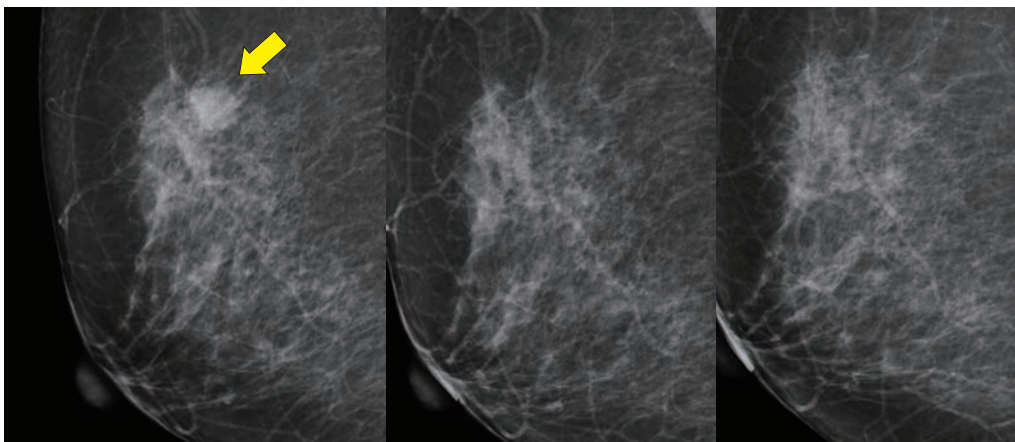


図1 FADの確信度が向上した症例

左より今回、2年前、3年前。過去2回ではFADを指摘できないが、今回は指摘が容易である (⚡)。